

複数の人種的背景を持つ人々を対象とした 心理学的研究の動向

— 計量テキスト分析を活用した把握 —

臨床心理学科 藤 岡 勲

抄 録

日本において、「ハーフ」「ダブル」「混血児」「国際児」等と呼ばれるような複数の民族的背景を持つ人々は、もはや珍しくない存在となりつつあるが、かれらを対象とした研究数は依然として多くはない。他方、欧米に目を向けると、複数の人種的背景を持つ人々（multiracial people）を対象とした膨大な研究が蓄積されている。本稿では、学術研究データベースにある、複数の人種的背景を持つ人々に関する文献のタイトルに対して行った計量テキスト分析を中心に、かれらを対象とした心理学的研究の動向を把握した。そして、日本における複数の民族的背景を持つ人々に対する支援にもつながるよう、本稿が行った①文献数の検討、②頻出語の検討、③語と語の関係の検討という3つに分けて、それぞれの意義について論じた。さらに、計量テキスト分析を通して研究動向を把握するという方法論的意義についても論じた。

Key Words : 国際結婚, 複数の民族的背景を持つ人々, 多文化間カウンセリング, 計量テキスト分析, 文献レビュー

問題と目的

日本において、「ハーフ」「ダブル」「混血児」「国際児」等と呼ばれるような複数の民族的背景を持つ人々¹⁾は、もはや珍しくない存在となりつつある。1990年では父母の一方が外国籍の出生率は全国で1.1%に留まっていたが、2000年から2019年にかけては1.9%から2.2%の値を保っている（厚生労働省, 2020b）。

このような状況において、かれらを対象とした研究も蓄積されつつある。たとえば、社会学的研究として、沖縄という地域性に着目した野入（2019）がある。また、発達心理学的研究としては、文化的アイデンティティに着目した鈴

木（2008）や、言語獲得に注目した柴山・ビアルケ（當山）・池上・高橋（2014）などがある。さらに、国際結婚家庭に対する支援を見据えた学際的な実証的研究もなされている（佐竹・金, 2017）。

ただ、その研究数は依然として充分とは言えないだろう。たとえば、かれらを対象とした臨床心理学的研究についてみた場合、心理援助で見立てを立てる際に活かせる、2つの民族的背景を統合したアイデンティティの類型化を行った藤岡（2014a）のような研究もある。しかし臨床心理学的研究では、たとえば、30年間にわたり『心理臨床学研究』に掲載された1101本の論文のうち、民族的マイノリティを対象とした

論文は9本(全体の0.82%)しかなかった(藤岡, 2014b)。この事実をはじめ, 研究数は依然として不足している。

研究数が少ないということは, 心理援助を展開する上で問題となる。多文化間カウンセリング(multicultural counseling)において重要な位置を占める, 多様な背景を持つ人々に適切に関わる能力(multicultural competence)には, 外せない要素があると考えられている(Sue, Sue, Neville, & Smith, 2019)。その要素の1つ目は, 多様な背景を持つ人々と適切に関わるスキル(skill)である。2つ目は, 自身を含め, ひとは社会・文化的要因からの影響を受けていることについての気づき(awareness)である。3つ目は, 社会・文化的要因が, 人々にいかなる影響を与えているかについての知識(knowledge)である。このように, 適切に関わる能力として, 知識を有することが重要となるが, 研究数が少ないということは, 複数の民族的背景を持つ人々の特徴を知るための知識を得難いことを意味する。

他方, 欧米に目を向けると, 複数の人種の背景を持つ人々(multiracial people)を対象とした膨大な研究が蓄積されている。当初は欧米でも, 複数の人種の背景を持つ人々に関する研究は, Park (1931) や Stonequist (1937/1961) のような先駆的なものはあったものの限られていた。しかし, 社会状況の変化とともに, 人種間の婚姻も増えていった(Spickard, 1989)。それにともない, 複数の人種の背景を持つ人々も増え, かれらを対象としたその後の研究に多大な影響を与えた, 記念碑的な書籍(Root, 1992, 1996)も出版された。そして, 複数の人種の背景を持つ人々, そして, かれらを対象とした研究も増え続け, 近年では, 膨大な研究の蓄積を内容分析の手法によりまとめること(Char-maraman, Woo, Quach, & Erkut, 2014)も可能となった状況にある。

海外の複数の人種の背景を持つ人々に関する知見は, 日本の複数の民族的背景を持つ人々を理解し, よりよい支援につなげるためにも活かせる面もあるだろう。両者は, 集団を分けるものとして, 「民族」(ethnicity)と「人種」(race)という異なる区分が用いられており²⁾, 民族と人種は, 別ものとして考えるべきという立場もある(Helms & Talleyrand, 1997)。その一方で, 両者は分けがたいものでもあり, 両者を分けずに検討することが望ましいという立場もある(Schwartz et al., 2014)。日本の国際結婚は, 異人種間のものだけでなく, 同人種間のものも多いことが人口動態統計からも示唆される(厚生労働省, 2020a)が, 後者の立場に立てば, 海外の知見も, 日本で十分に活かせるとも言えるだろう。

多数の研究の動向を把握する際には, これまで量的方法と質的方法が用いられてきた。量的方法の代表的なものとして, メタ分析(たとえば, 山田・井上, 2012)がある。これは, 既存の研究の結果を統計学的に整理しなおし, 全体的な傾向を示す手法である。他方, 質的方法の代表的なものには, ナラティブ・レビュー(narrative review; たとえば, Baumeister & Leary, 1997)と呼ばれるものがある。これは, 研究者が既存の研究を解釈しながら整理し, 一つの物語のような形で研究動向を示すものである。

そのような状況に対して, 膨大な先行研究の動向を把握する上で, 量的方法と質的方法を交差させるような, 計量テキスト分析を活用する新たな方法が示されている(藤岡, 2018)。計量テキスト分析とは, 「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し, 内容分析(content analysis)を行う方法である」(樋口, 2014, p. 15)。藤岡(2018)は, Psyc INFOにアップロードされている産業/組織/労働と文化との関係を扱った心理学的研究の

663タイトルをデータとして計量テキスト分析を行い、その領域の動向把握に成功し、この方法による研究動向の把握の可能性を示している。

本稿では、日本における複数の民族的背景を持つ人々に対する支援にもつながる心理学的研究の動向把握を目的として、学術研究データベースにある「複数の人種的背景を持つ人々」についての情報に対して計量テキスト分析を行う。

方法

本研究は、APA PsycNETというデータベースを活用した。APA PsycNETとは、アメリカ心理学会が提供しているデータベースであり、膨大な心理学および関連領域の文献情報がアップロードされている。そして、様々な条件を設定しながら検索することも可能である。

文献を検索するにあたっては、APA PsycNETにあるIndex Termsという検索条件において、複数の人種的背景を持つ人々を指す用語として設定された「*interracial offspring*」に該当する文献を抽出した。

さらに、APA PsycNETには、アップロードされている文献の研究対象の年齢に関する情報も入力されていた。そこで、年齢をもとにした発達段階ごとの傾向を知るため、Age Groupとして、① Neonatal (birth-1 mo), ② Infancy (2-23 mo), ③ Preschool Age (2-5 yrs), ④ School Age (6-12 yrs), ⑤ Adolescence (13-17 yrs), ⑥ Young Adulthood (18-29 yrs), ⑦ Thirties (30-39 yrs), ⑧ Middle Age (40-64 yrs), ⑨ Aged (65 yrs & older), ⑩ Very Old (85 yrs & older)ごとに文献を抽出した。なお、APA PsycNETにおける上記の検索作業を行ったのは、2019年9月1日であった。

本研究では、藤岡 (2018) にならい、APA PsycNETにアップロードされている文献情報

の中でも、タイトルをデータとした。なぜなら、「タイトルは論文の中心テーマを簡潔に述べ、研究で扱われる変数と理論的問題、またこの両者の関係を明確にするもの」(American Psychological Association, 2010 前田・江藤・田中訳 2011, p. 17) だからである。また、タイトルは、「データベースで、要約や検索の目的で論文の内容を示すものとしても使われる」(American Psychological Association, 2010 前田・江藤・田中訳 2011, p. 17) からである。

本研究では、タイトルに対して計量テキスト分析を行う際、KH Coderを活用した。KH Coderとは、計量テキスト分析を行う際に利用可能なフリー・ソフトウェアである(樋口, 2014)。KH Coderは、社会学的研究をはじめ、幅広い学問分野において、数多くの研究で利用されている(樋口, 2017)。臨床心理学分野においても、アンケートの自由記述に対して計量テキスト分析を行い、実践経験の長さにとまなう、他職種との協働の現状に対する臨床心理士の認識の特徴を示している(羽澄他, 2016)。他にも、パーソン・センタード・アプローチの考案者であるカール・ロジャーズの代表的な面接に対して計量テキスト分析を行った藤岡(2019)もある。

KH Coderによる計量テキスト分析を行う前に、文献のタイトル情報に対して、下記の作業を行った。まず、大文字を小文字に変換した。なぜなら、変換しなければ、同じ語(word)でも異なる語として認識されることもあるためであった。また、「,」「:」「?」「'」「"」「;」「(」「)」「/」の記号を半角スペースに置き換えた。なぜなら、これらの記号が残ったままでは適切な語と語の区切りができないことがあるためであった。なお、「-」は複数の単語を結びながら意味的には一つの単語をなすことがあるため、半角スペースには置き換えなかった。

分析対象となるタイトル情報は英語であった

ため、分析を行う際には、KH Coderの設定をStanford POS Taggerを使用しているLemmatizationにした。この設定にしたのは、言語学的に正確な語を抽出できることに加え、品詞別の語の選択が可能だという特徴がある(樋口, 2014)ためであった。

結果

複数の人種的背景を持つ人々の心理学的研究の動向を把握するにあたり、①Age Groupごとの文献数、②Age Groupごとの頻出語、③語と語の関係について示す。

Age Groupごとの文献数

複数の人種的背景を持つ人々の心理学的研究の動向を把握する上では、どのAge Groupにどれほどの文献があるかを知ることが重要となるだろう。なぜなら、発達段階によって複数の人種的背景を持つ人々の文献数が異なることも考えられるからである。そこで、Age Groupごとに、複数の人種的背景を持つ人々の文献数がどれほどあるかをまとめたのが、Figure 1である³⁾。

Figure 1をみると、Age Groupによって、正

規分布のような形で、文献数の多さが異なる傾向にあった。まず、Adolescence (13-17 yrs)とYoung Adulthood (18-29 yrs)の文献数が70-80件程度と、他のAge Groupに比べて多くなっていた。続いて、School Age (6-12 yrs)とThirties (30-39 yrs)が、30-40件程度と多くなっていた。そして、Preschool Age (2-5 yrs)とMiddle Age (40-64 yrs)が10-20件程度となっていた。また、Neonatal (birth-1 mo), Infancy (2-23 mo), Aged (65 yrs & older), Very Old (85 yrs & older)が10件未満と少なくなっていた。

Age Groupごとの頻出語

複数の人種的背景を持つ人々の心理学的研究の動向を把握する上では、タイトルでいかなる語が頻出しているかを知ることが重要となるであろう。なぜなら、先述のようにタイトルは、研究が扱った変数と理論的問題を示している(American Psychological Association, 2010 前田・江藤・田中訳 2011)からである。つまり、タイトルで使われている語が、研究の主要な概念となっているからである。そこで、Figure 1において、30件以上の文献数を示していた4つ

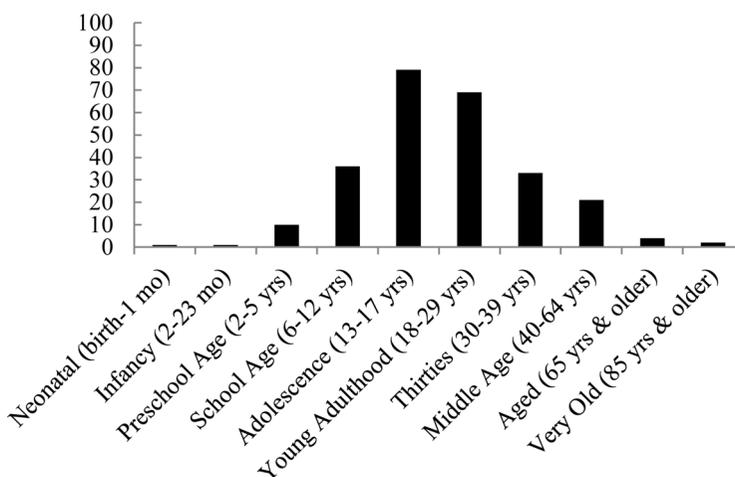


Figure 1 Age Groupごとの文献数

のAge Groupにおいて、どのような語がタイトルにおいて頻出するのかをまとめた。その結果がTable 1である。

Age Groupごとの最頻出10語をみると、各Age Groupのみによくあらわれる語があった。たとえば、School Age (6-12 yrs)のみ、「family」という語が最頻出10語に入っていた。また、Adolescence (13-17 yrs)のみ、「psychological」という語が最頻出10語に入っていた。さらにYoung Adulthood (18-29 yrs)のみ、「young」という語が最頻出10語に入っていた。そして、Thirties (30-39 yrs)のみ、「individual」という語が最頻出10語に入っていた。

その一方で、4つのAge Groupに一定の割合で共通してあらわれる語もあった。たとえば、「biracial」はいずれも5%程度、「multiracial」はいずれも1.5%程度であった。これらの語は、研究対象である「interracial offspring」が英語ではbiracial peopleあるいはmultiracial people等と呼ばれていることから、いずれのAge Groupにおいても頻出語として入っていたと考えられる。

一方で、共通してあらわれる語の中でも、「identity」はいずれのAge Groupでも頻出語と

して表れていたが、その割合は異なっていた。具体的には、School Age (6-12 yrs)では1.9%、Adolescence (13-17 yrs)では3.6%、Young Adulthood (18-29 yrs)では5.9%、Thirties (30-39 yrs)では6.8%となっており、思春期以降で相対的に高い値を示していた。

AdolescenceとYoung Adulthoodにおける語と語の関係

複数の人種的背景を持つ人々の心理学的研究の動向を把握する上では、頻出する重要概念間の関係を知ることも重要となるであろう。なぜなら、概念間の関係は、Age Groupごとに異なる傾向があるとも考えられるからである。そこで、Adolescence (13-17 yrs)とYoung Adulthood (18-29 yrs)において頻出した語の関係を示した。その結果が、Figure 2とFigure 3である。なお、共起ネットワークを作成するにあたり、一定のデータ量（タイトルを構成する語数）が求められる。そこで、Figure 1において、70件以上の文献数を示したAdolescence (13-17 yrs)とYoung Adulthood (18-29 yrs)のみを分析対象とした。

なお、共起ネットワークを作成する際には、①タイトルにおいて3回以上用いられていた語

Table 1 Age Groupごとの最頻出10語

School Age (6-12 yrs)		Adolescence (13-17 yrs)		Young Adulthood (18-29 yrs)		Thirties (30-39 yrs)	
抽出語	出現回数 割合	抽出語	出現回数 割合	抽出語	出現回数 割合	抽出語	出現回数 割合
child	25 8.1%	biracial	31 5.0%	biracial	38 6.4%	identity	20 6.8%
biracial	17 5.5%	adolescent	23 3.7%	identity	35 5.9%	biracial	17 5.8%
racial	10 3.2%	identity	22 3.6%	white	20 3.4%	white	12 4.1%
black	7 2.3%	child	15 2.4%	black	19 3.2%	black	11 3.7%
identity	6 1.9%	racial	12 1.9%	racial	18 3.1%	racial	11 3.7%
development	5 1.6%	multiracial	11 1.8%	woman	11 1.9%	adult	6 2.0%
family	4 1.3%	mixed	10 1.6%	adult	10 1.7%	child	5 1.7%
girl	4 1.3%	black	9 1.5%	development	10 1.7%	individual	5 1.7%
identificator	4 1.3%	white	9 1.5%	young	9 1.5%	multiracial	5 1.7%
multiracial	4 1.3%	psychological	8 1.3%	multiracial	8 1.4%	developmen	4 1.4%
s	4 1.3%	youth	8 1.3%			process	4 1.4%
social	4 1.3%					woman	4 1.4%

※「割合」は「出現回数」を各Age Groupの総抽出語数(使用)で除して求めた

で、②Jaccard係数の値が0.15以上の語同士の関係を抽出した。①の基準を設定したのは、一定数以上用いられている語が重要な語であると考えたためであった。また、②の基準を設定したのは、一定の重要性をもちつつも、多彩な関係を抽出するためであった。

Figure 2をみると、まず、Adolescence (13-17 yrs)において、アイデンティティを軸とした語と語の関係がみられた。具体的には、「identity」と「biracial」とのつながりがあった。また、「identification」が「racial」を介しながら「multiracial」ともつながっていた。

また、Figure 2をみると、Adolescence (13-17 yrs)においては、精神的健康を軸とする語と語の関係もみられた。具体的には、「stress」

と「adolescent」がつながっていた。また、「psychological」と「symptom」と「counseling」というつながりがあった。

Figure 3をみると、Young Adulthood (18-29 yrs)においても、アイデンティティを軸とする語と語の関係がみられた。具体的には、Young Adulthoodにおいても「identity」が「racial」と「biracial」とつながっていた。

その一方で、Figure 3をみると、Young Adulthood (18-29 yrs)においては、人間関係を軸とする語と語の関係もみられた。具体的には、「relationship」が「ethnic」とつながっていた。また、「young」や「adult」を介してはいるが、「relationship」が「interracial」ともつながっていた。

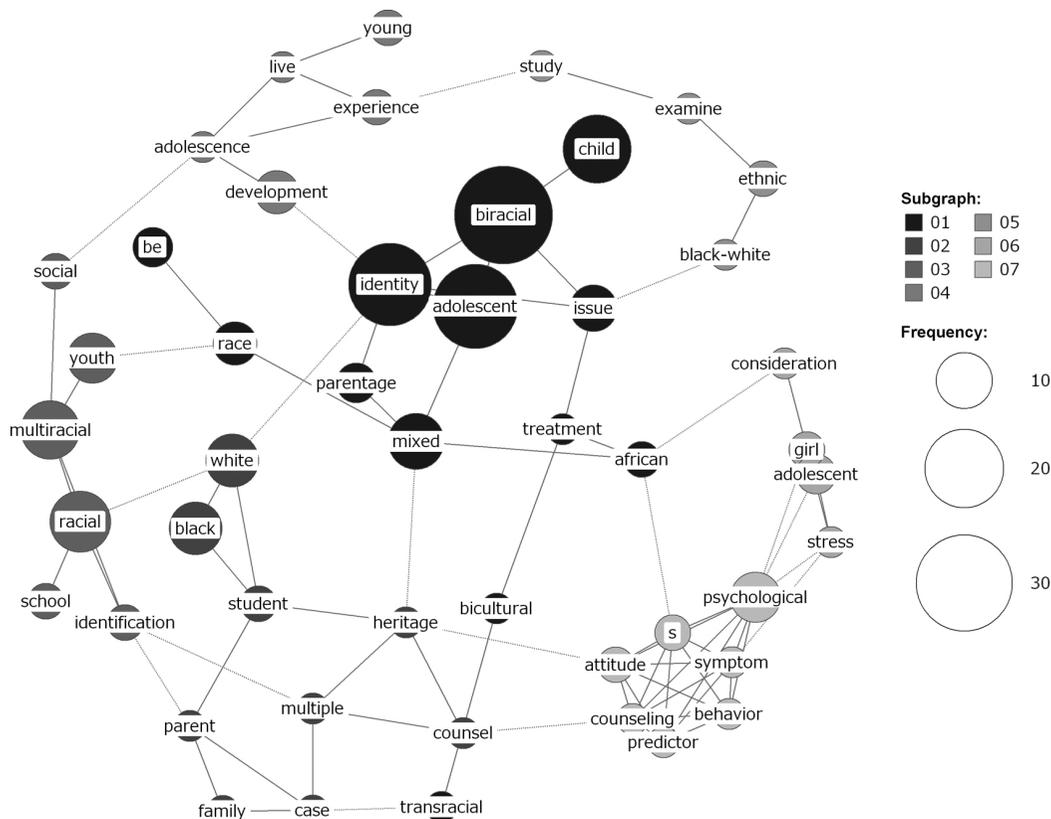


Figure 2 Adolescence (13-17 yrs) の共起ネットワーク

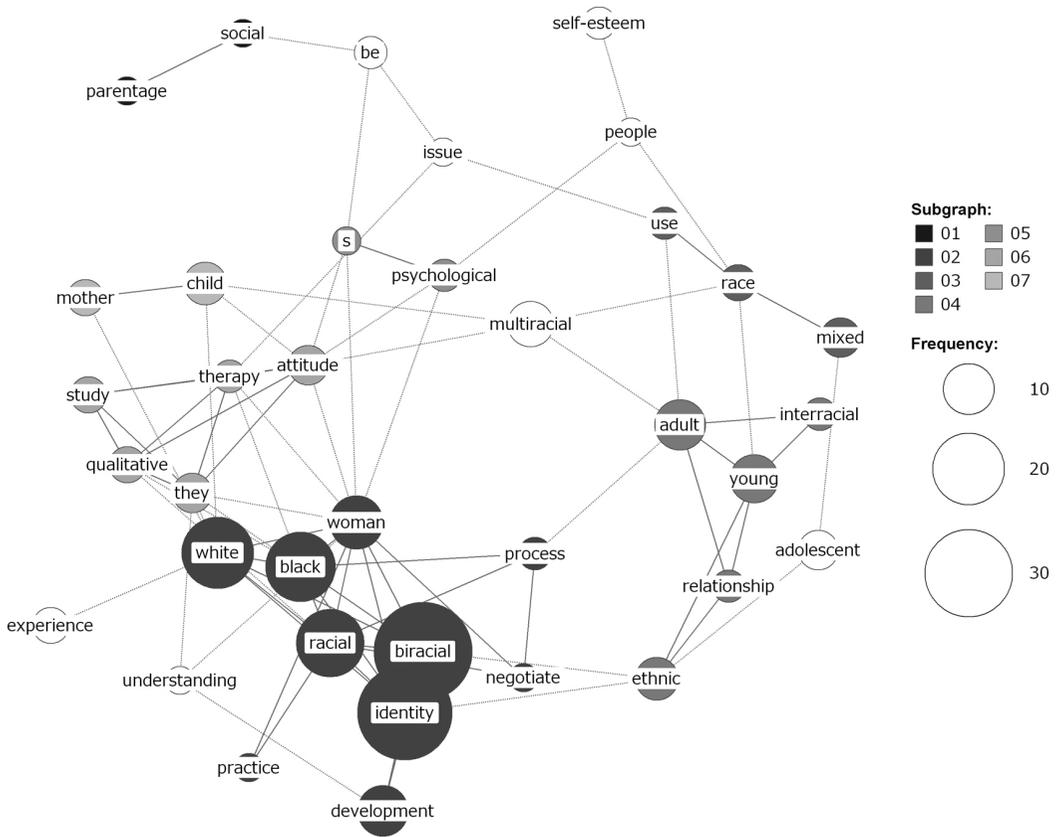


Figure 3 Young Adulthood (18-29 yrs) の共起ネットワーク

考察

本稿では、学術研究データベースである APA PsycNET にアップロードされている複数の人種的背景を持つ人々に関する文献のタイトルに対する計量テキスト分析を中心に、心理学的研究の動向を把握した。以下、本稿が行った①文献数の検討、②類出語の検討、③語と語の関係の検討という3つに分けて、それぞれの意義について論じる。さらに、計量テキスト分析を通して研究動向を把握するという方法論的意義についても論じる。その上で、今後の展望についても述べる。

文献数の検討

Age Group ごとの文献数の検討を通して本稿が明らかにしたのは、Figure 1 にあったように、School Age (6-12 yrs)・Adolescence (13-17 yrs)・Young Adulthood (18-29 yrs)・Thirties (30-39 yrs) という、青年期（およびその前後）の時期の研究数が多いことであった。このことは、複数の人種的背景を持つ人々にとって、それらの時期に、様々なことが起こりやすいことを示唆する。つまり、複数の人種的背景を持つ人々の間で、青年期（およびその前後）の時期に、様々な特有の体験をしていると考えられているからこそ、それらの時期の研究数が増えている可能性がある。

複数の人種的背景を持つ人々の間で、青年期

(およびその前後)の時期に、様々な特有の体験をしている可能性があるという知見は、実践的意義も有する。なぜなら、多くの人々が経験していないであろう固有な体験をこれらの時期にしているということは、これらの時期に、他者にとって想像しにくい困難をかれらが経験しているとも考えられるからである。この点は、日本における複数の民族的背景を持つ人々にも当てはまる可能性がある。したがって、日本の実践家も、この点には留意すべきであろう。

頻出語の検討

文献タイトルの頻出語の検討を通して本稿が明らかにしたことは、Table 1にあったように、「identity」という語は、School Age (6-12 yrs)・Adolescence (13-17 yrs)・Young Adulthood (18-29 yrs)・Thirties (30-39 yrs)のいずれのAge Groupでも頻出語としてあらわれていたことである。このことは、複数の人種的背景を持つ人々にとって、アイデンティティがテーマとなりやすいことを示唆している。数が多い上に影響力も強いマジョリティに比べ、マイノリティは、数が少ない上に影響力が小さい立場にある (Schermerhorn, 1970)。そのような状況では、マイノリティはアイデンティティの面で様々な体験をするとも考えられている (Sue, et al., 2019)。本稿の結果は、複数の人種的背景を持つ人々においても、その傾向が当てはまる可能性を示唆している。そして、この点は、日本の実践家が、日本で生活する複数の民族的背景を持つ人々を支援する際、アイデンティティがテーマとなりやすいという心構えができることから、実践的意義を有するとも言える。

頻出語の検討を通して、本稿がさらに明らかにしたのは、「identity」という語が出現する割合は、思春期以降で相対的に高くなる傾向であった。このことは、複数の人種的背景を人々

は、アイデンティティに関して固有な体験を、その他の集団の構成員と比べて、長期間にわたりしている可能性を示唆している。アイデンティティの探索および確立は、若者の発達課題であり、成人期は異なる発達課題に取り組むと考えられている (Erikson, 1968)。しかし、本稿の結果からは、むしろ、Thirties (30-39 yrs)の方が、それより若いAge Groupよりも「identity」の出現率が高くなっていた。このことから、複数の人種的背景を持つ人々は、成人期に入ってから、アイデンティティに関して固有な体験を多くしている可能性を示している。そしてこの知見は、成人期にある人々でも、アイデンティティに関する悩みを有する可能性が低くないことを注意喚起させるという意味で、日本で生活する複数の民族的背景を持つ人々に関わる専門家に資する実践的意義もあると言える。

語と語の関係に対する検討

本稿では、文献数が他のAge Groupより多かった Adolescence (13-17 yrs)と Young Adulthood (18-29 yrs)の文献タイトルに対して共起ネットワークを作成した。そして、Adolescence (13-17 yrs)では、Figure 2にあったように、精神的健康に関する語を軸としたネットワークがある一方で、Young Adulthood (18-29 yrs)では、Figure 3にあったように、人間関係に関する語を軸としたネットワークがあることを明らかにした。このことは、複数の人種的背景を持つ人々に対して固有な体験をもたらしているのは、①発達段階ごとの特徴と、②複数の人種的背景を持つという特性が、交差していることが原因である可能性を示唆している。なぜなら、数ある青年期の発達の課題・特徴の中でも、精神的健康に関するネットワークが抽出されたからである。発達過程には、発達段階ごとに特徴的な出来事や傾向があ

ると考えられており(高橋・湯川・安藤・秋山, 2012a, 2012b, 2012c), たとえば, 青年期の発達の課題・特徴として, 内省的・精神的機能の発達, アイデンティティの確立, 性への関心と恋愛, セックスとジェンダー, 社会への関心があげられている(高橋他, 2012c)。また, 障がいや問題行動も注目されている(中釜, 2012)。そのような中, 本稿において, Adolescence (13-17 yrs) の注目すべき結果として, 精神的健康に関する語を軸としたネットワークが見いだされたことは, 複数の人種的背景を持つ人々が, 精神的健康に関して他の人々とは違う傾向を有する可能性を示唆すると言える。

また, この点は, Young Adulthood (18-29 yrs) に関しても同様だと考えられる。なぜなら, 数ある成人期の発達の課題・特徴の中でも, 人間関係に関するネットワークが抽出されたからである。たとえば, 成人期の発達の課題・特徴として, 結婚・非婚・離婚, 夫婦関係, 親となること・子育て, 老親との関係と介護, ワーク・ライフ・バランスがあげられている(高橋他, 2012c)。そのような中, 本稿において, Young Adulthood (18-29 yrs) の注目すべき結果として, 人間関係に関する語を軸としたネットワークが見いだされたことは, 複数の人種的背景を持つ人々が, 人間関係に関して他の人々とは違う傾向を有する可能性を示唆すると言える。

複数の人種的背景を持つ人々に対して固有な体験をもたらしているのは, ①発達段階ごとの特徴と, ②複数の人種的背景を持つという特性が, 交差している可能性を示したことには, 実践的意義もある。発達段階ごとの特徴は被援助者が抱える困難と結びつくことが多いことから, 心理援助職は, 発達段階ごとの特徴を理解し, 支援活動に臨むことが求められている(下山, 2001)。ただし, 特有の背景を持つことが発達段階ごとの特徴のあり方に影響を与え得る

ということは, 各発達段階における, マジョリティの立場にある人々の体験と, 複数の人種背景／民族的背景を持つ人々の体験とでは, 異なる面があり得るということである。したがって, 日本の心理援助職が, 複数の民族的背景を持つ人々を支援する際, 教科書に載っているような一般的な発達段階ごとの特徴が人々の生活に与える影響だけでなく, それらの特徴と社会・文化的要因との関係についても想像力を働かせながら被援助者と関わるのが重要になると言える。

方法論的意義

藤岡(2018)の手法にならない, 複数の人種背景を持つ人々を対象とした心理学的研究の文献タイトルに対して計量テキスト分析を行った本稿には, 方法論的意義もある。まず, 計量テキスト分析は, テキストという質的データを扱うものの, 統計学的な分析を行うことから, 高い再現性を有する。研究動向を把握する方法として, ナラティブ・レビューと呼ばれるような, 研究者の解釈により, 動向を整理する質的方法もある。ただ, この方法は, その解釈が優れたものでなければ, 主観的側面が強いものになってしまい, 実態を正確に把握したものとは言い難くもなるだろう。また, 研究動向の把握法の中には, メタ分析のような統計学を活用した量的方法もある。ただし, メタ分析の研究対象は, 実験やサーベイなどの量的研究を行った文献が基本となるだろう。そのため, 文献というサンプルの抽出段階で偏りが生じる危険性もある。既存の方法にこのような限界点があるなか, 本研究は藤岡(2018)に続き, 学術研究データベース掲載情報に対して計量テキスト分析を行うことが, 「質」と「量」を組み合わせた新たな可能性を持った研究動向の把握法であることを再度示した意義があるだろう。

今後の展望

以上のような意義がある一方で、本研究には留意すべき点がある。まず、ここでとらえられた研究動向という「現実」は、研究者からみた現実であり、必ずしもそれが、複数の人種の背景を持つ人々からみた現実と合致しているとは限らないという点である。たとえば、本稿は、青年期（およびその前後）の時期の研究数が多いことを明らかにした。そして、複数の人種の背景を持つ人々が、それらの時期に様々な特有の体験をしているのではと議論した。ただ、これらの時期に研究数が多くなっているのは、一般的に大学生をサンプルとする研究が多くなっていることが原因かもしれない。もしそうであるならば、当事者の実感以上に、これらの時期に注目が集まっている可能性も否定できない。また、本稿は、頻出語として「identity」が多くなっていることから、複数の人種の背景を持つ人々にとって、アイデンティティがテーマになりやすいのではとも議論した。ただ、文献のタイトルにおいて「identity」が多くなっているのは、複数の人種の背景を持つ人々にとってアイデンティティがテーマとなっているというよりも、アイデンティティがテーマとなっているであろうと研究者が考えたため、アイデンティティに関する研究が数多く行われていたとも考えられる。つまり、この点に関しても、当事者の実感以上に、注目が集まり過ぎている可能性も否定できない。

このような留意すべき点はあるものの、本稿は複数の人種の背景を持つ人々を対象とした心理学的研究の動向を計量テキスト分析を活用しながら把握し、新たな文献レビュー法の有益性も示しながら、研究だけでなく実践に資する知見を示した。今後は、これらの知見を踏まえながら、日本においても複数の民族的背景を持つ人々を対象とした研究および実践活動が発展することが求められる。また、様々な研究テーマ

に対して、計量テキスト分析を活用した研究動向の把握が行われることも期待したい。

注

- 1) 日本社会における国際結婚家庭のもとで生まれた複数の民族的背景を持つ人々の呼ばれ方については、たとえば岡村 (2016) を参照されたい。
- 2) 人種の定義として、たとえば、「身体的特徴、祖先や言語といった共通性によって、人口を部分化したり、“区分”するためによく用いられる社会的概念」(VandenBos, 2007 繁樹・四本監訳, 2013, p. 449) がある。また、民族の定義として、たとえば、「社会的、文化的、言語的、宗教的、人種的なバックグラウンドを共有する人々の集団」(VandenBos, 2007 繁樹・四本監訳, 2013, p. 857) がある。これらの定義から、強いて言えば、人種は身体的特徴を、民族は文化的特徴にまずは注目するとも言える。その一方で、これらの定義から、人種と民族では共通する部分も少ないとも言えるだろう。
- 3) APA PsycNETにおいて、文献によっては複数のAge Groupに割り振られているものもあったが、そのような文献は、APA PsycNETに掲載されている情報のまま用いた。

引用文献

- American Psychological Association. (2010). Publication manual of the American Psychological Association (6th ed.). Washington, DC: American Psychological Association. (アメリカ心理学会 前田 樹海・江藤 裕之・田中 健彦 (訳) (2011). APA論文作成マニュアル 第2版 医学書院)
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1997). Writing

- narrative literature reviews. *Review of General Psychology*, 1(3), 311-320.
- Charmaraman, L., Woo, M., Quach, A., & Erkut, S. (2014). How have researchers studied multiracial populations? A content and methodological review of 20 years of research. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, 20(3), 336-352.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. New York: W. W. Norton & Company.
- 藤岡 勲 (2014a). 2つの民族的背景を持つ人々の両背景を統合したアイデンティティ 質的心理学研究, No. 13, 24-40.
- 藤岡 勲 (2014b). 『心理臨床学研究』における民族的マイノリティを対象とした研究活動. *心理臨床科学*, 4(1), 13-23.
- 藤岡 勲 (2018). 産業／組織／労働と文化との関係を扱った心理学的研究の展望——計量テキスト分析を活用した傾向の把握—— *同志社心理*, No. 64, 24-36.
- 藤岡 勲 (2019). パーソン・センタード・アプローチに対する分析——計量テキスト分析によるロジャーズの面接記録の検討—— 武藤崇 (編), *臨床言語心理学の可能性——公認心理師時代における心理学の基礎を再考する——* (pp. 71-94) 晃洋書房
- 羽澄 恵・能登 眸・川崎 隆・梶原 潤・高木 郁彦・下山 晴彦 (2016). 他職種との協働の現状に対する臨床心理士の認識——実践経験の長さに伴う特徴に注目して—— *心理臨床学研究*, 33(6), 556-567.
- Helms, J. E., & Talleyrand, R. M. (1997). Race is not ethnicity. *American Psychologist*, 52(11), 1246-1247.
- 樋口 耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して—— ナカニシヤ出版
- 樋口 耕一 (2017). 計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望 *社会学評論*, 68(3), 334-350.
- 厚生労働省 (2020a). 人口動態調査 人口動態統計 確定数 婚姻 上巻 9-19 夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数百分率 年次 2019年 Retrieved from https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450011&tstat=000001028897&cycle=7&year=20190&month=0&tclass1=000001053058&tclass2=000001053061&tclass3=000001053069&stat_infid=000031981585&result_back=1&tclass4val=0 (2020年11月26日)
- 厚生労働省 (2020b). 人口動態調査 人口動態統計 確定数 出生 上巻 4-32 父母の国籍別にみた年次別出生数及び百分率 年次2019年 Retrieved from https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450011&tstat=000001028897&cycle=7&year=20190&month=0&tclass1=000001053058&tclass2=000001053061&tclass3=000001053064&stat_infid=000031981536&result_back=1&tclass4val=0 (2020年11月26日)
- 中釜 洋子 (2012). 障がい・問題行動 高橋 恵子・湯川 良三・安藤 寿康・秋山 弘子 (編) 発達科学入門3 青年期～後期高齢期 (pp. 69-83) 東京大学出版会
- 野入 直美 (2019). 沖縄のアメラジアン——移動と「ダブル」の社会学的研究—— 甲南大学博士論文
- 岡村 兵衛 (2016). 「ハーフ」をめぐる言説——研究者や支援者の著述を中心に—— 川島 浩平・竹沢 泰子 (編) 人種神話を解体する3 —「血」の政治学を越えて—— (pp. 37-67) 東京大学出版会
- Park, R. E. (1931). Mentality of racial hybrids. *American Journal of Sociology*, 36(4), 534-

- 551.
- Root, M. P. P. (Ed.). (1992). *Racially mixed people in America*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Root, M. P. P. (Ed.). (1996). *The multiracial experience: Racial borders as the new frontier*. Thousand Oaks, California: Sage Publication.
- 佐竹 眞明・金 愛慶 (編) (2017). 国際結婚と多文化共生——多文化家族の支援にむけて—— 明石書店
- Schermerhorn, R. A. (1970). *Comparative ethnic relations: A framework for theory and research*. New York: Random House.
- Schwartz, S. J., Syed, M., Yip, T., Knight, G. P., Umaña-Taylor, A. J., Rivas-Drake, D., . . . Ethnic and Racial Identity in the 21st Century Study Group. (2014). Methodological issues in ethnic and racial identity research with ethnic minority populations: Theoretical precision, measurement issues, and research designs. *Child Development*, 85(1), 58-76.
- 柴山 真琴・ビアルケ (當山) 千咲・池上 摩希子・高橋 登 (2014). 小学校中学年の国際児は現地校・補習校の宿題をどのように遂行しているのか——独日国際家族における二言語での読み書き力の協働的形成—— 質的心理学研究, No. 13, 155-175.
- 下山 晴彦 (2001). 発達臨床心理学の発想 下山晴彦・丹野 義彦 (編) 講座 臨床心理学 5——発達臨床心理学—— (pp. 3-15) 東京大学出版会
- Spickard, P. R. (1989). *Mixed blood: Intermarriage and ethnic identity in twentieth-century America*. Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- Stonequist, E. V. (1937/1961). *The marginal man: a study in personality and culture conflict*. New York, NY: Russell & Russell.
- Sue, D. W., Sue, D., Neville, H. A., & Smith, L. (2019). *Counseling the culturally diverse: Theory and practice* (8th ed.). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- 鈴木 一代 (2008). 海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成 プレーン出版
- 高橋 恵子・湯川 良三・安藤 寿康・秋山 弘子 (編) (2012a). 発達科学入門1 理論と方法 東京大学出版会
- 高橋 恵子・湯川 良三・安藤 寿康・秋山 弘子 (編) (2012b). 発達科学入門2 胎児期～児童期 東京大学出版会
- 高橋 恵子・湯川 良三・安藤 寿康・秋山 弘子 (編) (2012c). 発達科学入門3 青年期～後期高齢期 東京大学出版会
- VandenBos, G. R. (Ed.). (2007). *APA dictionary of psychology*. Washington, DC: American Psychological Association. (ファンデンボス, G. R. 繁榊 算男・四本 裕子 (監訳) (2013). *APA心理学大辞典* 培風館)
- 山田 剛史・井上 俊哉 (2012). *メタ分析入門——心理・教育研究の系統的レビューのために——* 東京大学出版会

付記

本稿は、日本心理学会第83回大会での報告をもとに執筆したものです。また、本研究は科研費17K13951の助成を受けたものです。

(ふじおか いさお 臨床心理学科)